



# 強制収容所のバイオリニスト

ヘレナ・ドウニチーニヴィンスカ著

## 戦争に翻弄された女性たち

本書のサブタイトルにある「ビルケナウ」とは、ポーランドの村のドイツ語読みである。ここにアウシュビッツ強制収容所があり、著者はそこに収容されたポーランド人なのだ。

一般市民はいかに戦争によって翻弄されるか、そのことを本書から知ることができる。

第2次世界大戦が勃発した後、ポーランドはまず旧ソ連の占領下に入る。町中から生活物資は消え、労働命令によってひたすら働かされる日々。この旧ソ連占領体制が、瞬時にしてドイツ占領へと変わるのだ。ドイツ軍の一見すると秩序だった姿から、少しは経済状況が改善される、と期待するのだが、そのよつなことはありえなかった。著者と母親は理由もなく逮捕

評 山村基毅(ルポライター)

され、刑務所に収監。そして、アウシュビッツ―ビルケナウ強制収容所へと送られる。

著者は幼少時からバイオリンを習っていたため、収容所音楽隊に入ることになる。主な役割は、囚人労働隊の構内からの出入りに際して行進曲を演奏することだった。やがて娯楽のためのコンサートも開くようになるのだが、それは収容所における

囚人統治を助けているのでは、という葛藤をも生み出す。たとえば、コンサートの最中に多くのユダヤ人がガス室へと連行されていった。音楽によって過酷な運命を忘れさせられた。これを著者は「狡猾なペテン行為」と呼ぶが、音楽隊に対して他の囚人から冷たい視線が投げられることもあったという。

しかし、強制収容所という極限状況にあつて、自らの生命を守るためにとつた選択を、誰が責められようか。

本書の末尾には著者の記憶をもとに、五十数人の女性音楽隊メンバーの名、音楽隊在籍期間とその後の運命が簡単に記されている。多くは戦後まで生き延びているが、ビルケナウで死去あるいは他の収容所で死去という者もいる。その一人一人に、著者と同じような生の軌跡があるはずだが、それが語られることはない。その無念さが立ち上つてくるような気がした。



1915年、ウィーン生まれ。45年5月、自由の身となり、ポーランド音楽出版所に就職。音楽教育出版物などを手がける

(田村和子訳／新日本出版社 2484円)